

2024年5月19日 ペンテコステ礼拝

説教題「ぶどうの実りのように」ヨハネによる福音書 15 章 5 節、16～17 節

主任牧師 加藤 誠

**「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。」(ヨハネ福音書15章5節)**

今日はペンテコステ。ペンテコステは教会の誕生日です。弟子たちが扉を開けて外にの人々の間に出かけていき、主イエスを伝え始めた日。その日をもって「キリスト教会が誕生」しました。逆を言えば、扉を閉じて家の中にもったままの弟子たちはまだ「教会」と呼ばれていなかった。なぜなら教会の「矢印」は隣り人に向かい、世界に向かう「矢印」だからです。イエス・キリストが世界のすべての人々に神の愛を伝えるために来てくださったように、教会は、この世界の中で、隣り人の間で、主イエスが教えてくださった愛を生きるために、立てられているからです。

今、ご一緒に読んだヨハネ 15 章 16～17 節を読む時、今日、この礼拝に私たち一人ひとりを招き入れてくださった主イエスは、「私たちが出かけて行って実を結び、その実が残るように」、私たちが「互いに愛し合う者とされる」ことを深く祈っておられることを知らされます。

例えば、ザアカイは主イエスがわざわざ自分の家を訪ねて、神の愛を教えてくださったことがうれしくて仕方なかった時に、自分と隣り人との関係が「これまでと同じままではいけない」と気づかされていきました。「隣り人に対する自分自身の考え、まなざし、態度を、変えていこう！」「イエスさまから神の愛を知らされた自分も、神の愛にふさわしい者に変えられていきたい！」と。彼は「イエスさまが訪ねてくださって、昨日は楽しい夜だったなあ」では終わらなかった。ザアカイは主イエスと一緒に「新しい朝、新しい一日」を迎えたいと思い、彼は自分の家の扉を開けて「新しい隣り人との関係を生きる」歩みに踏み出していきました。そして主イエスはそんなザアカイの姿に「今日、この家に救いが来た！」と言われたのです。神さまの愛による「救い」は、わたしと隣り人との関係を新たに変わっていく「救い」なのです。

今朝のヨハネ 15 章 5 節は今年度の大井教会の主題聖句です。ある方がこの聖句を思い巡らしながら「私たちはぶどうの枝になれているのだろうか？」と自分に問いかけておられました。ぶどうの枝は、ぶどうの幹につながって初めて実を結ぶ枝になります。枝だけでは何の実りも結べません。15 章 5 節の後半が大切でしょう。「わたしを離れては、あなたがたは何もできない」。ぶどうの幹であるイエス・キリストにしつかりとつなげられて、初めて私たちはぶどうの枝とされるのです。

ペンテコステ前のペトロたち弟子の姿を見るときに、彼らは主イエスから「エルサ

レムにとどまり、父が約束されたものを待ちなさい」と命じられました。なぜ「エルサレム」だったのか？ なぜ「待て」だったのか？ エルサレムは、彼らが主イエスを裏切ってしまい、主イエスを憎む人々が大勢いる場所であり、決して居やすい場所ではなかったはずですが。しかし「そのエルサレムにとどまれ」と主イエスは命じられた。それは弟子たちが自分の弱さ、愚かさ、裏切りから目をそらすことなく、主イエスの力なしには何もできず、何も始められない自らの無力と向かい合い、ただ神の力に依り頼むことを学ぶためではなかったか…と想像します。クリスチャンになる歩みは「弱さが強さに変えられていく歩み」ですが、「弱さとまったく無縁の強い人に変えられる」のではなく、「相変わらず弱さや裏切りを抱えながらも、主の恵みと愛と希望に支えられ導かれていく歩み」です。ペンテコステの日、聖霊を注がれたペトロたちは「強くなった自分を誇る者」のではなく、「弱さを抱えた自分たちをなお愛し抜いてくださる主イエスの恵みを誇る者」として福音を語り始めたのでした。

マタイ福音書 25 章の「タラントンのたとえ」は、主イエスが十字架の死の別れを前に、愛する弟子たちに「遺言」として語られたお話です。「まもなくあなたがたはわたしの姿が見えなくなる。これからあなたたちは、主人である神から託されたタラントンを、自分で祈り、自分で考えて用いていくのだよ」と。この譬え話で、僕たちに託されたタラントン、それは「愛の賜物の力」だと受け止めます。人との出会いの中で用いていくよう託された「愛の賜物の力」。私たちにとって「知らない新しい人」との出会いに「愛の賜物」を使うのは勇気がいります。こちらが傷つき、こちらが損をする不安がよぎるからです。1 タラントンの人は「愛の賜物を失って損をしたら主人に怒られる…」と恐れてタラントンを土の中に埋めました。けれども主人の願いは、僕たちが自分に託された「愛の賜物の力」を新しい出会いの中でどんどん用いていくことでした。わたしがあなたがたに託した「愛の賜物の力」を勇気をもって用いていきなさい。必ずそれは倍になって豊かな実を結ぶから大丈夫！。わたしの姿は見えなくても、わたしはあなたたちと共にいる！…と、そのような励ましを伝えるために語られえたのが、この「タラントンのたとえ」だと思うのです。

ぶどうの木であるイエス・キリストにつながる枝に結ぶ「ぶどうの実」は、わたしのイメージでは、「同じ色」のぶどうの実というより、「いろとりどり」のぶどうの実です。なぜなら、ペンテコステの日、弟子たちが新しい出会いに導かれていったのは、同じユダヤ人ではなく、世界中の色とりどりの肌の色をし、さまざまな言葉を語る人々の間でした。私たちも、一人ひとりがぶどうの枝とされ、いろとりどりの実を結ぶ教会とされる夢を思い描きます。さまざまな個性、色、違いを喜び、弱さの中に働かれる主の恵みと愛と希望を語っていく教会とされていきたいのです。一人ひとりがぶどうの幹である主イエスにしっかりとつなげられて行きましょう。